

## 女子部

### 「発見するまなざし」と「創りだせる手」を養う

金井 知子

上手な作品をつくるのが美術教育の目的ではない。ものを自分の目で見つめ、そこに何かを見いだしていくこと。手を使って見出したものを形にしていくこと。そのような制作の過程の中で、どんな物のなかにも美しさや面白さを見つげられる柔らかい心と、考えて創り出すことの出来る頭と手を養いたい。また、思いのままにつくるだけでなく、色彩、構成、素材の特性を知るといった造形の理論的な学びも加わり、美術は独立して存在しているものではなく、様々な分野や生活とつながっていることに気づいてほしいと願い、日々の授業を積み重ねてきた。

今回の美術展では、2013年度から2016年度に日々の授業で制作した中等科1年から高等科3年までの作品の中から、63種類の作品を展示した。

#### I. 女子部の美術カリキュラムと展示概要

女子部では「自分の目で見、耳で聴き、手で触れ、五感を働かせて身近な自然や物の中に隠された美を発見する目と発見する心を育てる」「物の美しさを感じる心や感性を培い、日々の生活を美しく豊かにすることが出来る人を育てる」という教育目標を掲げ、具体的なカリキュラムを展開している。

自由学園の初代美術指導者である山本鼎は「自分の感じたことがもっとも尊い」という言葉を残している。形式をなぞるのではなく、自らの観察によって、「美」を見出すことのできる感性を養うことは、創立当初から変わらない女子部の美術教育が目指すものである。

また、美術と生活あるいは美術と身の回りの環境や自然が切り離されることなく、結びついて生徒達一人一人の中に存在できるようにと願い日々の授業を実践している。制作が中心の授業では、素描や色彩理論などの基礎勉強、絵画や版画といった平面表現、立体表現、デザイン、工芸、鑑賞というカテゴリにわけ、6年間を通じて美術の様々な要素を学ぶことが出来るよう考えている。

多様な授業内容を発表できるように、展示構成を考え、女子部の食堂、食堂前の芝生、中等科教室の棟を展示空間とした。更にワークショップも会場内で行った。

会場入り口に掲示した古川武彦先生の言葉を紹介する。

#### —美術工芸展に寄せて

『美しく生き生きした生徒達の声が響いているか展示を通して再確認したいと思っています。きれいで上手な



作品の展示が目的ではありません。自らの考えを持って、判断し働きかける感性を育て、何気ない日常の中から気づくこと、発見する意識が大切です。生活に密着した教育から得たものはすべての事柄に波及する

でしょう。学園生活や四季折々の豊かな自然環境がいろいろな形、色彩、素材感など創造の着想を与えてくれることでしょう。』

美術科主任講師 古川武彦



<女子部会場>

## II. 展示準備について

1学期の終わりに高等科3年のリーダー及び実務の係を決定し、11月の展示に向けた準備が始まった。女子部食堂と食堂前の芝生、中等科教室棟を展示会場として、それぞれの作品がより活き活きとみえるように展示構成を考えた。女子部食堂は天井が高く美しい室内空間だが、壁面が少ない。その為、絵画や平面作品を展示する場合、パネルを使って多くの壁面を準備しなければならない。今回、平面作品が多かったこと、絵画にふさわしい展示空間をつくりたいと考えたことなどから、中等科の教室棟に絵画展示室を設けた。また、リストを作成し漏れなく在校生全員の作品が出品できるようにした。

会期前の1週間を使い、展示作業を行った。各学年のクラスリーダーを中心に、自分たちが作った作品はなるべく自分たちで展示した。作品は置かれる環境によってその見え方が大きく変わる。例えば立体作品を展示する場合はどのような台座に載せるか、高さや素材を考える必要がある。また、展示空間全体にその作品がどのように影響するかを感じとり、考えることは美術の学びの大切な要素である。

作品の素材、技法、味わいが多岐に渡るため、限られた空間の中で、それらがお互いを引き立て合い、調和して展示するにはいかにすべきか、試行錯誤が続いた。

事前に、生徒の係と模型を作成し、大まかな展示計画とイメージをつくり展示作業に入ったが、実際に初めて見ると、思っていたようにいかなかったり、また逆に思わぬところで、予想以上の展示効果を得られたりする。その度に、生徒達は、現場対応を求められ苦労したと思う。また、四尺×八尺の大きなパネルを立てて展示用の壁を設けることや、高い天井からワイヤーで展示物を吊る作業等、女子生徒の力では困難なことも多くあったが、次第にドリルの扱いにも馴れ、自分たちの手で協力して会場を作り上げていくことは楽しくもあり、また達成感を味わえたのではないかなと思う。また、キャプションの係は作品用キャプションだけではなく、制作過程の説明パネルや、お客様が混乱なく順路を進めるよう工夫した。

高等科3年生はそのような会場設営とともに、下級生への展示の指示など惜しみなく力を発揮し、その働きによって女子部の展示会場が完成した。



<展示作業の様子>

## III. 展示された作品と授業の取り組みについて

展示した作品と授業実践についてその一部を紹介する。

### <絵画表現>

・人物をテーマに

食堂会場の入口を入ってすぐ自画像を展示した。高等科1年生の木炭で描いたものと、高等科3年生の油絵による作品を展示した。また高等科3年では彫刻家の古川武彦先生にご指導いただき人物クロッキーにも取り組んだ。全紙サイズの和紙に墨を使って友人を描いた。人物の動きを捉えること、大きく描くことに不慣れで試行錯誤を繰り返す人が多かったが、「形を探っていく」をいう感覚を学べたのではないかなと思う。

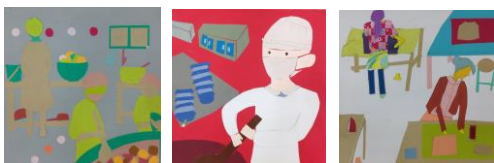


<自画像 高1 高3>



<人物クロッキー 高3>

中等科1年では自分たちの生活の様子をキルト作品にした。台所での昼食作りや裁縫の授業でブラウスを製作している上級生の授業を見学してもらい、表現のきっかけとした。お料理の授業の場面では、調理用の服装、鍋や調理器具、また裁縫の授業では型紙を置いて裁断している様子やミシンや裁縫用具など、人物の動きや様々な道具の質感に着目してスケッチを描いた。描いたスケッチを元に色紙に貼り絵でデザイン画を作成し、デザインに近い色の布を探してアップリケと刺繍でキルトを製作した。中等科1年生はまだ縫物の経験は少ないが技術的なことよりも、図案を楽しく表現できるように布や糸の色を工夫しながら制作する事を大切にされた。



<働く人 コラージュ 中1>



<働く人 キルト 中1>

・静物をテーマに

中等科2年では、身近にあるものをモチーフに「みる」ということに焦点をあてて、細密画と墨絵に取り組んだ。普段見馴れているものを改めてよくみると様々な発見がある。墨絵では、墨の扱いに苦労した人もいたが、滲みやぼかし、墨の濃淡、様々な太さの筆を使って描き、味わいのある作品が完成した。



<墨絵 身近なものをモチーフに 中2>

中等科3年では墨と水彩で野菜を描いた。毎日の昼食や寮での調理をしている女子部の生徒にとって野菜は非常に身近なモチーフである。カボチャの堅さや、とれたての葉ものの生命力、その瑞々しさ、ひとつひとつ形や大きさ色が違うことなどなど、野菜の特性を生徒たちは実際に調理を通して感じ取り知っている。女子部ではたびたびモチーフに野菜をとりあげるが、生徒達と野菜への親しみが画面から伝わってくるように感じる。中等科3年では墨と水彩で野菜を描いた。



<野菜 墨絵 中3>

高等科1年生では静物をモチーフにコラージュと描画で表現した。絵画は「輪郭線を描いて色を塗る」のではなく、物と物あるいは物と空間の関係性を描くことである。そのことを生徒達に気づいてほしいと思い授業を行った。更に自分で意識的に描くだけでなく偶然性を利用することで、絵画表現の可能性が広がることなどを感じ取ってほしいと考え、あらかじめクラフトペーパーにコラージュをしてそれを下地として、その上に様々な描画材料で描くという試みをした。



< 静物 コラージュと描画による表現 高1 >

また高等科1年では鉛筆による静物デッサンにも取り組んだ。デッサンとは技術的なものと考えられがちだが、対象物を的確に表現するための「物の見方」に気づく機会になるとよいと考えた。卓上に置かれた果物や木材など自然物、ガラス器、布、金属など、これらの様々な物の質感の違いを意識して、物の見方を深め、表現力を高めることを目指した。生徒達は物の立体的な形や構造、成り立ち、質感、色彩、そして重さや匂いまで感じ取り、それを画面に表現しようと試行錯誤した。



< 静物 素描 高1 >

高等科3年では毎年、滝沢具幸先生にご指導頂き、学園にある草花をモチーフに水彩画を描いている。学園の畑や庭で集めた草花はどれも勢いがあり、また自然に植生されている形のままアトリエに持ってくるので、植物の生命力を自然により近い形で感じられる。魅力

的なモチーフを目にすると、「描いてみたい」という意欲につながり、多くの力作が完成した。



< 学園の草花 高3 >



< 授業の様子 高3 >



< 学園の草花 高3 >

・風景を描く

女子部ではたびたび、自由学園の風景をテーマに作品を制作する。日々を送り見馴れている学園の庭に改めて目を向け、何かを見つけることが、表現の出発になる。多くの自然や有機的な空間、建物が織りなす、この環境は無限に多くの発見と驚きを与えてくれる。表現方法は学年に応じて、様々だが、それぞれの学園風景を一つのコーナーにまとめて展示した。中等科1年生が水彩で描いた風景は、入学して最初に描いたもの。描きたい場所を探すことから授業が始まる。1年生にとって、学園の庭は新鮮で、描いてみたいという素直な気持ちから画面から伝わってくる。



中等科2年ではコラグラフという版画技法によって学園風景を表現した。エアキャップや緩衝剤、段ボールや紐など、身の回りにある廃材や素材を使って版をつくり、油性インクで摺る。風景の中で見つけた気になるものを画面上で再構成し、様々な素材を用いて石、水、草花などそれぞれの質感を表現することを試みた。



<学園風景 版画 中2>

中等科3年では毎年油絵による風景画を制作している。三原色と白のみを使って、描く風景は、混色によってさまざまな色をつくりだす必要があり、混色の学びにもなっている。

また、手作りインクを使って木肌の表情を描くという課題にも取り組んだ。黄色は学園のクチナシやサフラン、橙は玉ねぎの皮、茶色はドングリを煮出し、緑は山藍を絞ってインクを作った。自然物から出来たインクだけで描いた作品は木々の力強さを感じられる作品となった。



<学園風景 3原色で描く 中3>



<木肌を描く 中3>

<立体表現>

芝生には中等科3年生の合作で制作した動物の立体作品を設置した。全員で上野動物園にスケッチにでかけ、それを基にグループごとに相談して制作した。さまざまな木材、廃材を使い、動物の生命感の表現を目指した。大きな作品になったため、自立させることに苦労したり、大きな丸太をのこぎりで切るなど力と根気のいる作業もあったが、積極的に楽しんで取り組む姿があり、完成して芝生に展示すると女子部の中庭が賑やかな雰囲気になった。美術工芸展が普段なかなか取り組むことが出来ない大作に取り組める良い機会となった。



<生きている形を探して 中3合作>



<制作の様子 中3>

中等科1年では野菜や果物のもつ生命力を、新聞紙を使って表現した。色紙に不透明水彩絵の具とオイルパステルで野菜を描き、その絵を基に造形した。新聞紙というシンプルな材料を使って、どうしたら野菜の特徴を表現できるかそれぞれ工夫した。



<野菜をモチーフに 絵画と立体表現 中1>

中等科3年では毎年、塑像の授業を行っている。今回の展示では遠足の情景を表現した作品、体操会の様子を表した作品、学園内で飼育されているウサギ、豚を観察して制作した作品、の3種類の塑像作品を展示した。

遠足の情景は、登山の遠足を終えたあとで、1人一つ人物の塑像作品を制作、そのあとで、大きな山や岩などを木材と和紙を使って合作で制作し、人物の作品とあわせて展示した。授業では休憩している様子や、転びそうな場面など、遠足の様子を思い出しながら制作した。生徒達は様々な人物の動きをつくり、自立させることに苦労する人もいたが、立体作品を制作する事の面白さや、絵画では表現出来ない造形の魅力を感じられたのではないかなと思う。群像として展示すると、生徒達の声が聞こえてくるような雰囲気の作品になったと思う。

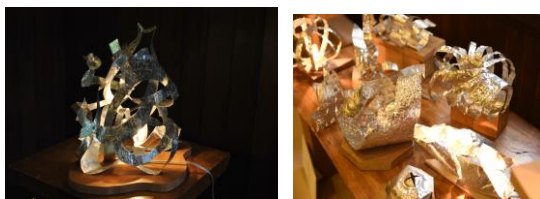


< 塑像・合作 遠足の情景 中3 >



< 塑像 ウサギ・ブタ 中3 >

高等科2年では金属を使い立体構成について学んでいる。一枚のアルミ板から形を切り出し、叩くなどして、成形する。「光を包む形」をテーマにしたランプシェードと、「浮遊する形・飛翔する形」をテーマに制作したモビールを展示した。抽象的なテーマを具体的な形にあらわしていく難しい課題であったが、金属の持つ特性を活かして、様々な形のモビールが完成した。



< ランプシェード・光を包む形 高2 >



< モビール・浮遊する形・飛翔する形 高2 >

また、秋に色づいた葉、木の実を描き、それをもとにフェルティングで、大きな葉をつくった。フェルティングは羊の原毛をフェルトにしていく作業である。羊毛には、人の髪の毛と同じようにキューティクルがあり、お湯と石鹸をつけて揉みこむと、キューティクルが絡み合いフェルト化(縮絨)する。授業では、この縮絨の仕組みを体感すると共に、色づくりを学んだ。羊毛も絵具と同様、混ぜ合わせることで多様な色を生み出すことができる。



< 制作の様子 高2 >

<デザイン・構成>

高等科1年ではグラフィックデザインの基礎として平面構成の課題に取り組む。この課題では、彩度、明度、補色、対比等の色彩の基本と他者へ伝達するツールというデザインのもつ特性について学ぶ。また、黄金比をはじめとする美しく合理的な画面比率についても学ぶ機会となっている。2014年の自由学園音楽会開催の年には音、または音楽をテーマに平面構成し、ポスターとパンフレットのデザインに選ばれた。

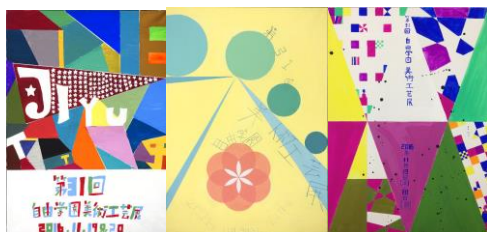
また2016年度は美術工芸展のポスター制作に取り組んだ。ラフスケッチから始まり、平面構成、レタリング、レイアウトなどを工夫して、情報をより良く伝えるためのアイデアを視覚的に表現することを目指した。完成したポスターの中から、今回の美術工芸展のポスター・チラシのデザインが選ばれた。

また高等科1年は、毎年絵本の制作にも取り組んでいる。言葉、抽象表現(絵画)、レイアウト(デザイン)、製本(工芸)の要素を含む制作である。

小説、エッセイなどの文学作品の中から、各自が選んだ一文や一節を幾つか抜き出し、具体的な形を持たない抽象的絵画表現と組み合わせる作者の世界を表現する絵本をつくる。読む人それぞれが想像してその世界観の広がりを感じられるような絵本であり、作者本人が数年或いは数十年後に自身の原風景と再会できる作品でもあるのではないかと感じている。



<文字を使った平面構成 高1>



<美術工芸展ポスターの制作 高1>

<絵本 高1>

中等科1年では、毛糸でミニタペストリーを制作した。正方形を1本の線で2分割して出来た2つ形を使って図案を制作した。図形をもとに、抽象的な図案を考えていく。タペストリーの毛糸の刺し方もあえて技法の指導はせず本人の工夫で図案を表現する事を目指した。ごつごつと立体的で力強い作品、きっちりと同じステッチで刺した端正な作品などそれぞれの個性が出た。小さい作品ではあるが集中して取り組み厚みのある作品となった。



<タペストリー 中1>



<生活を彩る工芸>

女子部では生活のなかに調和する表現を考え、実際に日々の中に、作品を置くことも大切にしてきた。今回は、2種類の衝立を制作し展示した。

中等科1年では一人一人の「染色」による作品をつなげて制作。観葉植物の葉の色や形、模様、棘や厚み、茎とのつながり方などを丁寧に観察し、個性的で有機的な形を見つけることから、授業が始まる。色紙にスケッチを描く。自由な色使いで大きく描かれたスケッチを元に正方形の図案をおこしていく。縦横や大小の概念を外し自由に考えて、図案は抽象的なイメージへと拡がりをみせる。出来た図案を麻布にステンシルしたり、筆で描いたりして捺染作品を制作。高等科3年生の協力を得て衝立に仕立てた。モチーフをよく見て描くことでその特徴を掴み、染色作品に展開する過程では、自由に描きながらも的確な表現ができるようになる。



<染めのための図案 中1>



<衝立 染色/中1 仕立て/高3>

高等科2年は女子部で来客時などに使われる衝立の制作をした。春に様々な学園の植物をスケッチし、各自が図案をおこし刺繍したものを合わせて仕立てた。図案化するにあたり衝立の使用目的を確認しあい、私的なものではなく多くの人を使うこと、また女子部の建物や風景にも調和させることなどを考え、客観的な視点を持って制作する事を学んだ。植物の持つ柔らかい色と動きをどのように表現するか考え、300色以上の刺繍糸から、組み合わせを考えて図案に適した色を選ぶことで色彩についての学びを深める機会にもなった。



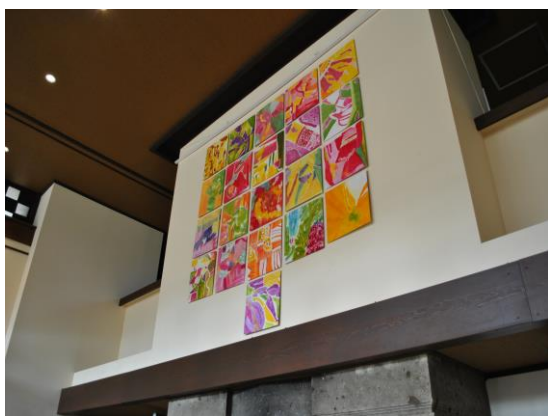
<衝立 高2>

高等科3年では、ガラスを用いて小さなパネルとキャンドルスタンドを制作した。使用したガラスはヨーロッパやアメリカで作られた手作りのもの。不均一な厚みで気泡が入り陽にかざすと美しい色と影が室内に映る。生徒たちはガラスを選ぶとき、とても楽しそうだった。自分の考えた形に組み合わせる為に時間をかけて削り、ハンダで組み立てる制作過程は難しい事も多い。作品は美術工芸展の後、久しぶりにクリスマス午餐会の会場となった女子部食堂を彩った。このように自分の手で作った作品が生活を彩る。そのような体験がまた制作にも活かされてくると思う。



<キャンドルスタンド 高3>

会場中央には高等科3年生の臙纈染めによる花をテーマとした染色作品を展示した。抽象的なデザインを創り出す為に、まずモチーフの花を観察した。学園に咲く花をペンで詳細に描見る方向を変え拡大して描き花卉、ガク、茎、葉などの特徴を掴む。その後、彩色スケッチしデザインを作成する。3つの段階はスケッチからデザインへのアプローチの1例に過ぎないが、お手本通り作るのではなくオリジナルデザインを考え制作する大切さを感じて欲しいと考えている。臙纈染めはロウで伏せることと染めることをどういう手順でするか、各自のデザインによって全く違う。皆よく考え工夫して夫々に美しい作品となった。展示する際、作品の並べ方や展示方法も知恵と力を出し合い食堂の正面壁を彩った。



<華(ろうけつ染) 高3>

#### IV.遠足のしおり表紙面の展示について

女子部では授業以外の場で、美術の学びを活かすことも大切に考えている。毎年行われている遠足の際に、生徒と教師に配布される「しおり」の表紙の制作は、第一回の遠足から今日まで毎年、生徒達の手で続けられている。

今回、展示室内にコーナーを設け、自由学園資料室に保存されていた1961年から今年度までの55年間の「遠足のしおり」を展示した。技法は、木版画、型染、プリントゴッコなど時代によって様々だが、「手摺り」にこだわり毎年制作されている。55年分の中等科、高等科それぞれの遠足のしおりは計120冊あまりにのぼり、その時代ごとの生徒達の息づかいが伝わるように感じた。デジタル印刷が当たり前になっている昨今、手摺りならではの印刷物は新鮮であり、毎年遠足の前の高揚感とともに、しおりの表紙を楽しみにしている生徒も少なくない。今回の展示では、多くの卒業生が懐かしそうにご覧になっている姿が印象的であった。



#### V.ワークショップ

作品展の他に、小枝と糸を使ったオブジェ、小物作りのワークショップも行った。高等科3年の係の生徒を中心に幅広い年齢層のお客様楽しんでいただけるように内容を考えた。

様々な色の毛糸、綿糸、麻糸などを小枝に巻き付けたり、編んだりして、造形する。そのまま飾ったり、安全ピンをつけてブローチにしたりできるように考えた。

係の生徒は、学園内で小枝を集め、また美術室にある糸を使って試作を重ねた。物が溢れ、また簡単に何でも手に入るようになった昨今、身近にある「素材」と自分の手をつかって何かを創り出すことは、造形活動の原初的な喜びであり、また自由学園の美術教育で大切にしていることの一つの要素である。

小さい子どもから大人まで多くの参加者があり、作品を身につけて会場をご覧になっているお客様もあり、係の生徒達も達成感を感じられたのではないかなと思う。



## VI.おわりに

4年に一度の美術工芸展は毎年行われる他の行事と異なり、今回が初めての美術工芸展という生徒も多い。リーダー学年の高等科3年生も中等科2年だった4年前の記憶を呼び起こしながら、ようやく美術工芸展を形づくっていく。そして多くの生徒、教職員の尽力のもと今回も展示会場を完成させることができた。また、喫茶での軽食の調理や販売をはじめとして、常務組織の働きに生徒全員が力を出した。

4年間の作品を見渡すことが出来る美術工芸展は、生徒達にとって作品を客観的に見直すきっかけとなる。また私たち教師にとっては、授業の実践を振り返り、新たな出発のできる機会である。展示された多くの作品から、女子部の生徒達ひとりひとりの姿が真っすぐに表れていただろうか。作品から感じられる生徒達の感性は、美術の授業だけで培われるものではなく、自由学園での毎日の生活、環境、また様々な教科の学びと相まって生まれ、それが美術での造形活動にも大きく影響していると感じる。美術教育にとって、身近に在って触れる事の出来る豊かな自然とその自然を観察することのできる自由学園は大変恵まれた環境である。今回の展示では、女子部生徒の作品の色彩の豊かさについて複数の方から感想をいただいた。色彩感覚ひとつとっても、自由学園の環境と学びによって自然に養われているといっても過言ではないと思う。一方で、今後の課題にも気づかされた。

今回の美術工芸展は2013年度からの4年間の実践の発表であったが、それらは4年間で構築されたものではなく、これまでの95年の自由学園の教育の歩みのうえにあることを再確認する機会となった。過去を振り返り現在を見つめ、そしてまた心を新たに10代の柔らかい感性と向き合い、豊かな授業を実践していけるよう更なる努力をしていきたい。



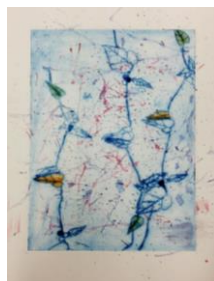
<以下、本文で触れられなかった作品写真>



<素描 中2>



<ドライポイント 高3>



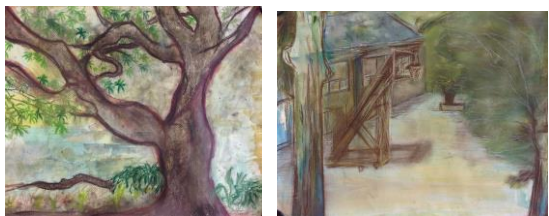
<版画による表現 中2>



<手触りを描く 中3>



<素描 高1>



<学園風景 上段中2 下段高3>



<刺繍レリーフ布と糸で描く 高3>



<ファイバーアート 高2>



<色彩コンポジション/新緑 高3>